

グループ心性と個人との葛藤と
グループ文化の発生との
因果関係について

～Bionのグループ理論に基づく実験的研究～

The causal relationship between the group mentality and the individual conflict and the emergence of the group culture: An experimental study based on Bion's group theory.

野 村 達 也

Tatsuya NOMURA

社会学部人間関係学科

要 約

本研究はWilfred Bionのグループ理論に基づく実験的研究であり、その理論の中でも「グループ文化」という概念に焦点を当て、グループにおいて文化がどのように発生するのかについての臨床的な仮説を、実験的に検証することを目的としている。

この概念に基づき、次のような仮説をたて、研究を行った。仮説は、「グループに葛藤が生じたとき、グループ文化欲求は高まるであろう」というものである。

実験は、ランダムに抽出した学生169名の被験者を、1グループ6名の計32グループで構成し、その内21グループにはサクラを1名入れて行われた。

そして本研究の仮説を統計的手法を用いて検証していった結果、仮説は検証された。

I. 問 題

文化という言葉は日頃よく耳にし、口にする言葉である。しかし一般的に、その場にある文化は意識することがあっても、文化の発生過程について考えることは少ないのではないだろうか。Geertz (1973) は、「文化は象徴に表現される意味のパターンで、歴史的に伝承されるものであり、人間が生活に関する知識と態度を伝承し、永続させ、発展させるために用いる、象徴的な形式に表現され伝承される概念の体系を表している。」と述べ、Tylorは「文化あるいは文明とは、その広い民族学上の意味で理解されるところでは、社会の成員としての人間 (man) によって獲得された知識、信条、芸術、法、道徳、慣習や、他のいろいろな能力や習性 (habits) を含む複雑な総体である」と述べている。これらの文化の定義は、文化の静態的な面、あるいは維持という側面を強調したものである。しかし、文化に

は誕生があり、変化も起こる。Wilfred Bion (1961) は小集団における文化を、「グループ文化」という概念を用いて表している。

そこで今回は、Bion(1961)の理論の中にある「グループ文化」という概念を中心に、文化の発生について実証的な研究を行いたいと思う。Bionのグループ理論の中で本論文に必要となる基本的な概念は、「作動グループ」、「基底的理想定グループ」、「グループ心性」、「グループ文化」である。そのためにまず、これらの基本的概念から整理していくことにする。

1. Bionのグループ理論

Bion(1961)は、Tavistock clinicでのグループ経験をもとに、彼の先輩であるFreud(1921)のように、グループにおける個々の活動と、グループ行動研究に多大な影響を及ぼした精神分析家であり、ある独特なグループ理論を發展させた人物である。

Bionによると、グループが1つの課せられた仕事をやり通そうとする時に、2つの方向が生じるという。1つは共同でその仕事に取り組む方向(作動グループ)であり、もう1つは、同じ感情を共有することにより仕事を妨げる方向(基底的理想定グループ)である。このような2種類の現象は、常時グループ内に存在しており、そのどちらかが支配的になっている。これらの説明は以下の通りである。

a) 作動グループ(work group)

作動グループとして機能しているグループは、グループのメンバーが基本的な作業によって結ばれ、それに沿って行動する。そしてこのグループ参加のためには、「幾年にも及ぶ修練があり、経験を積むことで、精神的発達を可能にする能力をもった人のみ可能である」。また、その作業に向けられたグループの活動は、現実との関連を持ち、作業遂行のために合理的かつ科学的な方法を用いる。そのため、活動の現実的側面としての「時間」

と「発達」は常に重視されている。つまり、グループのメンバーは自分や他人の個性を認識し、作業を成し遂げる責任感と、高い達成感を求めて行動するといえる。

また、作動グループとは、現実との接触、欲求不満に対する耐性、感情のコントロールなどを内包する心的状態である。そのため、新しい理念が進展していくを可能にするのである。しかし、その行動はある他の精神活動によって時に妨げられ、時に推進される。Bionはこの邪魔をする行動を、基底的理想グループと名付けた。

b) 基底的理想グループ(basic assumption group)

基底的理想グループとは、作動グループに不可欠なグループの様々な要素に伴う恐れや不安といった苦痛を、同じように強力な情緒的衝動の特性を持った、ある他の精神活動によって阻止され、回避される活動のことである。このような活動が支配的なグループの状態をBionは基底的理想グループと名付けた。また、基底的理想に支配されているグループの情動状態は即時的不可避的で、しかも本能的である。この活動に関与している個人個人は、自動的に否認なしにそうしているのであり、そのための特別な訓練や情緒的な経験あるいは心的成熟を何ら必要としない。この活動では発達も衰退もなく、時間の概念もない。基底的理想は、幻想的であるが、そのメンバーにとっては、現実的で合理的であるという認識がある。

さらにBion(1961)は彼自身のグループ経験に基づいて、3つの異なった基底的理想を述べた。それは「依存基底的理想」、「闘争/逃避基底的理想」、「つがい基底的理想」である。一時期に1つの基底的理想だけが支配的であり、同時に2つの基底的理想が支配的になるとはならない。またグループは最初の基底的理想とは異なった、他の基底的理想に変わることができる。

それぞれの基底理想的行動内容を詳細に説明することは、この研究の範囲をはるかに超えているので、以下にはそれぞれの基底理想的行動的、

及び心理的な短い説明を紹介する。

①依存基底的想定(basic assumption of dependency)

このグループの特徴は、絶対的にある人に依存し、グループの必要とする物や欲望をその人（リーダー）によって、全部満足させられるべきであるという確信を抱くことである（Grinberg,1977）。

このグループの行動はそこにいるメンバー達がグループの作業に対して、自分は未成熟で助けを必要とする無力な存在、故に自身だけでは何もできない「かのように」振る舞う。つまり、グループは「未成熟有機体」であるといえる。一方、このグループにおけるリーダーは、全知全能としてグループの「食欲で絶え間ない」要求に応えることができ、さらにすべての問題を解決できるとみなされている。グループのこの食欲な要求が満たされないとき、またリーダーがその期待に応えることができないとき、そのリーダーは否認され、グループを任せるための新しいリーダーを探すという反応に出る。グループのリーダーは一人のメンバー、あるいはトレーナーであるかもしれないし、あるいはグループによって記録された歴史（聖書）のようなものであるかもしれない。例えばリーダーが、依存できるというグループの欲求に沿わないと判断されれば、グループはこの聖書に訴えリーダーに圧力をかけるためにこれを利用するだろう。

②闘争/逃避基底的想定(basic assumption of fight/flight)

Bionは闘争と逃避を別々には考えなかった。2つの局面は、共通の感情の目的を持っていると考えたからである。このグループは一体性を保つために、内部か外部にライバルか敵をつくる。そして、それに対してグループはいかにもまとまっているかのような印象を与える。そのグループのエネルギーはそれらの敵と戦うか、逃げるために使われる。このグループで選ばれるリーダーとは、漠然と感じられる（幻想的な）外部、あるいは内

部の敵と戦うか、もしくはその敵から逃げるようグループを動員し、指示を与える能力を持つことのできる人物である。もし、その敵が明確になっていないときには、リーダーに圧力がかかり、リーダーは良いリーダーと評価されるために、不当に敵を見つけたり、作り出したりする。また、このグループでは個人よりもグループという単位を重視する。

③つがい基底的思想(basic assumption of pairig)

このグループは、そのメンバーの中の2人(つがい)に注目する。誤解を避けるために述べておくが、つがい基底的思想グループにとって重要なのは、「つがい」そのものではなく、そのつがいによってもたらされる幻想である。このグループの存続はこれから生まれようとする何か(救世主)に対する希望、期待にかかっている。救世主とは、人間、あるいは一つの提案や計画、あるいはユートピア等である。つまりグループの抱えている問題や必要とするものがたとえどんなものであれ、将来起こる何かが、あるいはこれから生まれる誰かがそれを解決してくれるという集合的な無意識的信仰である。グループの行動はそのカップルの周りを中心とし、そしてその救世主待望は、そのつがいに託される。しかし、グループにとっては救世主待望自体が目的であって、この目的は決して満たされてはならない。なぜならこの希望が満たされるということは、もはやそこに希望がないということの意味するからである。また、このつがい基底的思想は、他の基底的思想とは違って、グループの雰囲気は、希望に満ちた期待、楽観、親密、幸福感、そして穏やかで心地よい感じによって特徴づけられる。

c) グループ心性(group mentality)

グループ心性とは、人々が1つのグループとして集まるときに起こる集合的心的活動であり、グループの一致した意志の表現である。そして、その意志には個人が無意識的に貢献する。しかし、個人が基底的思想に逆ら

って、思考したり、行動したりする場合は、その意志によって不快な影響を与えられることになる。このように、グループ心性は、グループ生活が実際に基底的想定に一致するように用いられる相互間のコミュニケーションの装置である (Hafsi,2000)。

d) グループ文化(group culture)

グループ文化とは、個人の欲望とグループ心性の葛藤の関数である。グループ文化にはルール、リーダーシップ、グループ構造といったものがあり、これらは全て基底的想定を反映している。そしてグループは、グループ文化を用いて、グループ心性の表現方法を変えたりあるいは弱めたりすると同時に個人の抵抗を減少させようとする。そうすることによって、影響を一時的に抑えようとするのである。このように、グループ文化はグループ心性と個人の間を生じる葛藤の結果であると同時に、その葛藤に対する防衛でもある。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、グループにおけるグループ文化発生の仕組みを検討することである。Bion(1961)の理論によると、グループ文化は個人の欲求とグループ心性の間に葛藤が生じたときに、その葛藤緩和のために発生するという。このことに基づいて、次のような仮説を立てた。

仮説：グループに葛藤が生じたとき、グループ文化欲求は高まるであろう。

この仮説を検討するために以下の研究を行った。

Ⅱ. 研究

1. 方法

a) 対象及び実施期間

実験の参加者として、奈良大学学部生169名をランダムに選出し、被験者とした。また、実験は心理学に関する講義の一環として行われた。

実験は、平成14年6月6日から7月12日の期間で実施された。

b) グループ構成

1グループ6名の計32グループで構成し、そのうち21グループはサクラ1名、被験者5名の実験群である。そして、残りの11グループが被験者6名の統制群である。また、各グループに1名リーダーとなる人をランダムに選出した。これはグループがスムーズに作業へ移行するために行ったものである。なお、被験者のグループ分けはランダムに行ったが、グループのメンバー構成は同性ばかりとし、顔見知りでないことを原則とした。

c) 実験室のデザイン

本実験は、奈良大学社会学部研究棟内にて実施された。Figure1に示されているように、実験室の様子は、録画用ビデオカメラとビデオカメラの音を強化するための集音機、マジックミラーによって隣室の実験管理室の実験者に判るようになっている。

実験室内には、質問紙と筆記用具を置いた机、タスクの内容と実験の流れを記したホワイトボード、中央にタスクを行う机と人数分の椅子6脚があり、そして各椅子の後ろにはA～Fまでの紙が貼られていた。また、机の上にはメモを取るための紙、鉛筆、消しゴムが置かれていた。

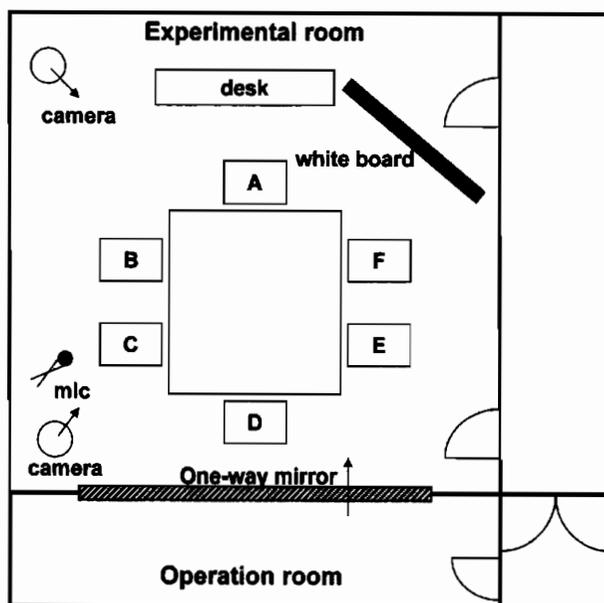


Figure 1 The design of the Experimental room

d) 実験の手続き

本研究は、Figure2に示されている順序で実験を行った。

実験の手続きについては以下の通りである。

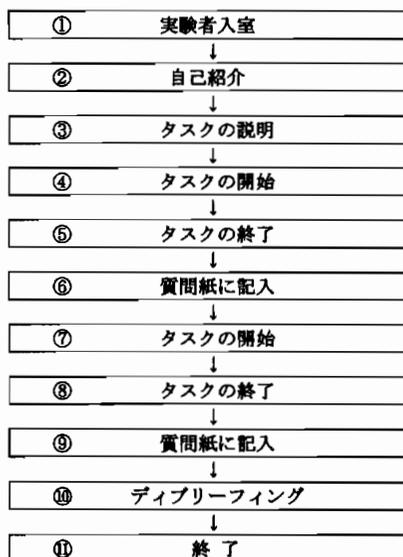


Figure 2 実験の流れ

①実験室入室前の指示

事前の連絡で知らされた被験者6名（統制群）、または被験者5名とサクラ1名（実験群）を社会学部研究棟3階エレベーター前に集合させた。出席確認後、被験者はそれぞれA～Fの名札を渡された。この時、Aの名札を渡された人をリーダーとした。ただし、実験群の場合、Fはサクラであり、事前に実験者はサクラであることを確認している。

実験者は、被験者を実験室まで誘導し、一番手前の扉から入るよう指示した。

②実験室入室

実験者は、被験者たちを実験室に入室させ、名札のアルファベットと同じ椅子に座るよう指示し、着席確認後、Aさんがリーダーとなって作業を進めていくように伝えた。そして、これからの指示は全て放送で行うことを告げ、実験者は実験室から退室した。

③自己紹介

タスクの内容は、被験者たちが1つのグループとして作業するように設定されていたので、まず自己紹介を導入した。これは、グループで共同作業をするためにはお互いのことを知っておいた方が良いと考えたからである。時間は2分間与えられた。

④タスクの説明

本実験のタスクは、今、自分達の町に原子力発電所の建設計画があり、それについてメンバー全員で話し合い、グループとして賛成か反対かはっきりとした結論を1つ出すことであった。

タスクは2つに分かれており、最初の20分間、話し合いの時間、そして後半の10分間が最終決定の時間と設定されていた。そしてこの後半の10

分間で、必ず最終的な結論（賛成か反対か）を出すよう伝えた。話し合いが20分間与えられたのは、この時間で、グループの方向性（賛成か反対か）を決めてもらうためである。また、より早く方向性を決めるようプレッシャーをかけるために、最初のタスクの説明の時に、結論に対する論理的理由も考えるよう指示し、その理由についても後で聞くことを伝えた。また、最終決定が10分間であるのも、このときには話し合う時間はあまり残っていないということ意識させるためである。

⑤タスクの実行

実験群では、実験の後半で、確実な葛藤の導入が必要であったため、サクラには前もって渡してあったマニュアルを完璧に行ってもらった。

そして、話し合い終了の5分前と2分前に残り時間を放送で伝えた。これは、グループを1つの結論へとなるべく早く方向づけるためである。そうすることによってグループは1つの答えへとまとまり、葛藤が起こりにくくなるのである。また、最終決定の時間においても5分前と3分前に残り時間を放送で伝えた。これは、実験群ではサクラの反発が起こるため結論を出せないグループへのプレッシャーであり、そうすることによって、グループは葛藤を増幅させるのである。統制群では、時間内にタスクを終えなければならないという意識を高め、結論を出させることにより、タスク終了時の葛藤を起こりにくくするためである。

⑥サクラの役割

サクラの役割は、実験群において、最終決定時間の残り5分からグループへの反発を始め、最後まで結論を出させないというものである。最終決定時間の残り5分の時点で結論が出ていない場合は、結論が出てから反発を開始し、それを最後まで続けることとした。したがって、サクラには原子力発電所に関する豊富な知識が必要とされたため、前もって訓練、指導

を行い、完璧にこなせる者を採用した。また、反発の開始を最終決定時間終了5分前以降という短い時間にしたのは、考える時間をあまり与えないことにより、グループ全体がサクラの意見に従ってしまうという状態になるのを防ぐためである。

⑦質問紙

質問紙の記入は話し合い終了時と、タスク終了時の2回行われた。2回とも同じ質問紙である。記入までは実験者が放送で誘導した。

質問は全部で19項目あり、5段階尺度で記入させた。また、この質問紙はメンバーのグループ文化の欲求度を測定するもので、事項はFight/Flightの側面、Dependencyの側面、Pairingの側面がランダムに書かれていた。

また、質問紙記入においても時間制限を設け、話し合い終了時の質問紙は6分間、タスク終了時は最後に感想を記入してもらうため8分間とした。

⑧ディブリーフィング

質問紙が終了と同時に、実験者1名が実験室に入室し、被験者たちに感謝の意を述べた。それから被験者たちに他の学生に実験のことを口外しないように強く要請した。これは、実験内容を知った被験者たちが実験を受けることによって今後の実験内容が変わることを避けるためである。

2. 結果

前にも述べたが、本実験の仮説は、「グループに葛藤が生じたとき、グループ文化欲求は高まるであろう。」というものであった。

質問紙では、「話し合い終了時のグループ文化欲求度」と「タスク終了時のグループ文化欲求度」が測定できるようになっている。質問紙は、それぞれの項目について自分がそう思うのか、それとも思わないのかということをも5段階評定で選ぶというものである。グループ文化欲求度の数値は、

「1」が最も高く、「5」が最も低い値とする。では次に分析結果を見ていこうと思う。

まず最初にこの質問紙の信頼性を調べるためにCronbach alphaを求めた。その結果、 $\alpha = .78$ であったため、この質問紙の妥当性が再確認された。

次にグループ文化の構造を明らかにするために因子分析を行った。その結果Table 1に示されているように5つの因子が抽出された。

Table 1 グループ文化欲求尺度の因子分析結果

因 子 内 容	因子負荷量
Factor 1 : 闘争逃避の文化	
・グループは1つにまとまらなければならない。	.716
・雰囲気盛り上げてくれる人がいた方が良い。	.643
・グループを引っばっていき力を持っている人が必要である。	.598
・正しい判断や正解へとグループを導くような人が必要である。	.574
・問題について仲良く話し合えるグループの方が良い。	.475
Factor 2 : つがいの文化	
・グループの中では多数派の意見が尊重されるべきである。	.749
・グループ全体のために個人の意見は抑えられるようにすべきである。	.744
・意見の対立を避ける必要がある。	.641
・グループにはメンバーそれぞれの意見が尊重されるような雰囲気が必要である。	-.528
・今のグループよりも小人数の仲の良いグループにした方が良い。	.419
Factor 3 : 依存の文化	
・話し合いのやり方を決めてくれる人が必要である。	.759
・話し合いのために司会をしてくれる人が必要である。	.648
・相性の良い人同士で話し合いをした方が良い。	.448
・グループを助けてくれる人が必要である。	.354
Factor 4 : リーダーシップにおける依存の文化	
・グループで有力な意見が重視されるようにならなければならない。	.720
・意見を提供してくれる知識を持った人が必要である。	.712
・リーダーを中心にして話し合いをするやり方の方が良い。	.437
Factor 5 : 不明確な対象への依存の文化	
・グループ以外の人の意見が必要である。	.763
・リーダーは話し合いによって決められる必要がある。	.522

Table 1 に示されているように第 1 因子グループは 5 つの項目からなり、この因子は「闘争/逃避の文化」と解釈できる。第 2 因子グループも 5 つの項目からなり、この因子は「つがいの文化」として解釈できる。第 3 因子グループは 4 つの項目にまとめられ、この因子は「依存の文化」と解釈できる。第 4 因子は 3 つの項目からなり「リーダーシップにおける依存の文化」として解釈できる。第 5 因子は 2 つの項目からなり、「不明確な対象への依存の文化」として解釈できる。

次に、実験群において Table 1 に示された 5 つの因子を、話し合い終了時とタスク終了時で比較するために、対応のある標本の *t* 検定を行った。その結果は Table 2 に示されている通りである。

Table 2 グループ文化欲求の側面から見た実験群における前半と後半の比較
(桜導入前と後)

グループ文化因子	話し合い終了後	タスク終了後
闘争/逃避の文化	2.36 (.62)	1.86* (.52)
つがいの文化	3.48 (.39)	2.73* (.41)
依存の文化	2.42 (.46)	2.09* (.62)
リーダーシップにおける依存の文化	2.47 (.64)	1.88* (.49)
不明確な対象への依存の文化	2.76 (.73)	2.22* (.62)

Note: 数値は平均 (上段) と標準偏差 (下段) を表す。

* $p < .0001$

Table 2 に示されているように、第 1 因子グループの「闘争/逃避の文化」において有意な差があった ($t(124)=10.5; p < .0001$)。第 2 因子グループの「つがいの文化」においても、有意な差があった ($t(124)=13.3; p < .0001$)。第 3

因子グループである「依存の文化」においても、有意な差があった ($t(124)=7.3; p<.0001$)。第4因子グループである「リーダーシップにおける依存の文化」においても有意な差があった ($t(124)=12.1; p<.0001$)。第5因子グループである「不明確な対象への依存の文化」においても有意な差があった ($t(124)=8.0; p<.0001$)。これら5つの因子において、グループ文化欲求度は作業終了時の方が高かった。

続いて、統制群においてTable 1に示された5つの因子を、話し合い終了時とタスク終了時で比較するために、対応のある標本のt検定を行った。その結果はTable 3に示されている通りである。

Table 3 グループ文化欲求の側面から見た統制群における前半と後半の比較
(桜導入は無し)

グループ文化因子	話し合い終了後	タスク終了後
闘争逃避の文化	2.41 (.70)	3.15* (.58)
つがいの文化	3.59 (.46)	3.62 (.42)
依存の文化	2.57 (.68)	3.02* (.65)
リーダーシップにおける依存の文化	3.02 (.75)	3.13 (.68)
不明確な対象への依存の文化	2.76 (.91)	2.80 (.65)

Note: 数値は平均(上段)と標準偏差(下段)を表す。

* $p<.0001$

Table 3に示されているように、第1因子グループの「闘争/逃避の文化」において有意な差があった ($t(64)=8.6; p<.0001$)。第3因子グループである「依存の文化」においても有意な差があった ($t(64)=5.1; p<.0001$)。これら2つの因子においては、グループ文化欲求度は作業終了時の方が低かった。

3. 考察

これまで述べてきたように、本研究では、Bionによるグループ理論（作動グループ、基底的理想グループ、グループ心性、グループ文化）を再検討し、それを明確化してきた。まず本実験で使われる理論の概念を説明し、そのつながりを考え、それらを含めて本実験の仮説を立てていった。そして、本実験ではグループ文化、グループ心性、基底的理想グループの関わりと、グループ文化の類型を検討し、グループ文化の発生について検証していった。

本研究の仮説は、「グループに葛藤が生じたとき、グループ文化欲求は高まるであろう。」というものであった。この仮説は、「グループ文化とは、個人の欲望とグループ心性との葛藤の関数である。」という考えから導き出されたものである。この仮説は、Table 2に示されているように、闘争/逃避の文化、つがいの文化、依存の文化、リーダーシップにおける依存の文化、不明確な対象への依存の文化の5つの因子全てにおいて、サクラが意図的に葛藤を起こす前よりも葛藤を起こした後の方がグループ文化欲求が高まっており、その差についても有意であったことから、検証されたと言える。また、Table 3に示されているように、サクラのいなかった、つまり意図的な葛藤を導入しなかったグループ（統制群）では、グループ文化欲求が高まっていないことが分かる。そして、実験群と統制群の違いは、意図的な葛藤の導入があったグループとなかったグループという点からも、この葛藤がグループ文化欲求の引き金となっているということが言え、仮説はさらに検証されたと言える。

また、これらのことから展開として、グループ文化の発生はその個人の欲求とグループ心性との間に葛藤が生じたときに起こるのであると考えられる。なぜならば、本実験での葛藤はグループ心性に従わない個人（サクラ）の行動によって引き起こされるものであり、その葛藤の産物としてグループ文化が発生しているからである。

Table 3に示されている、闘争/逃避の文化と依存の文化でそれぞれ有意な差が見られたが、これについては次のようなことが考えられる。闘争/逃避の文化については、タスクの内容が原子力発電所についてという日頃あまり触れることのない話題であり、知識不足のため考えることが困難であったことからタスクの内容にグループ全体が不満の感じたためであると思われる。そして、タスク終了時には結論が出ており、それについて考える必要がなくなったことによって葛藤が減少し、グループ文化欲求も減少したのである。依存の文化についても、タスクの困難さから、何も分からないという状態になり、依存したいが依存するものもはっきりしていないという点からグループ文化欲求が高まったと考えられる。そして、タスク終了時には結論も出ており依存の必要性が減少したため、グループ文化欲求も減少したということが言える。

今後の研究課題としては、グループでの葛藤導入前の実験群と統制群の比較、葛藤導入後の実験群と統制群の比較を行いたい。なぜなら、本研究では実験群、統制群それぞれの縦的な時間経過における比較しか行っておらず、各時間における横的な実験群と統制群の比較ができなかったためである。このことにより、葛藤とグループ文化の関わりがより深く検証されると思われる。また、基底的理想グループとグループ文化の関わり、ビデオテープによる客観的な分析も行い、どのようなグループ文化が、どのようなグループで発生するのか、そして、大集団における基底的理想グループと、そこに今存在する文化の発生契機の間わりについても、グループ文化の観点から捉えることができるのか検討していく価値はあると思う。

<付記>

本研究論文を作成するにあたり、貴重な御示唆と御指導を賜りました奈良大学社会学部 Med Hafsi教授に、心より感謝申し上げます。

参考文献

- Bion,W.R.,1961. Experience in groups and other papers. New York: Basic Books.:
(池田数好／訳 (1973)「集団精神療法の基礎」岩崎学術出版社)
- Bion,W.R.,1961. Experience in groups.:
(対馬忠／訳著 (1973)「グループ・アプローチ」サイマル出版会)
- Hafsi,M.,2000. Group Mentality and the Ways of Counteracting Individual Deviance from the Dominant Basic Assnmpion in D-groups:奈良大学紀要 第28号133-157
- Hogg,M.A.,1992. TheSocial Psychology of Group Cohesiveness.:From Attraction to Social Identity.London,Harvester Wheatsheaf.:
(廣田君美・藤澤等／訳 (1994)「集団凝集性の社会心理学」北大路書房)
- Freud,S,1921. Group psychology and the analysis of the ego. London:Hogarth Press.:
(井村恒郎・小此木啓吾／他訳 (1970)「集団心理学と自我の分析」[フロイドの著作集第6巻]人文書院)
- Grinberg,L.,Sor,D.,Tabak de Bianshedi,E.,1977. Intruduction to work of Bion.trans. A.Hahu.Scotland:Clunie press.:
(高橋哲郎／訳 (1982)「ピオン入門」岩崎学術出版社)
- Geertz,C,1973. The Interpretation of Cultures.New York: Basic Books.:
(吉田禎吾・柳川啓一・／他訳 (1987)「文化の解釈学」1・2,岩波書店)